

実証哲学あるいは実証主義における科学／社会  
サン＝シモンとその弟子コントから

野末 和夢（本学社会学研究科修士課程）

アンリ・ド・サン＝シモン（1760-1825）およびオーギュスト・コント（1798-1857）が唱えた「実証哲学（philosophie positive）」「実証主義（positivisme）」といえば、日本において代表的なところで哲学方面からは九鬼周造が、社会学方面からは清水幾多郎がそれを体系的に論じた。この点について西洋においては遡れば J. S. ミル、C. ルヌーヴィエ、É. デュルケムなどがいたし、二〇世紀では R. アロンや G. カングレム、F. A. ハイエクの名前を挙げることができるだろう。デュルケムは「十九世紀の哲学史における最も重要な出来事」として「実証哲学の樹立」を挙げ、その業績への「荣誉」はコント以上にサン＝シモンに帰すると述べた。ハイエクはむしろその反対でサン＝シモンに対して思想的独創性を認めなかったし、カングレムが科学哲学上で積極的に評価したのはコントに対してであった。サン＝シモンとコントへの評価を巡る二〇世紀の議論の形がどうであれ、その議論はサン＝シモン思想に対する「ユートピア」（エンゲルス）、コント思想に対する「頹廢」（子ミル）といったネガティブなイメージを幾分緩和したかに思われた。しかし今日の国外研究において多くの論者が評価するのは、十九世紀中葉を通じて流行ったサン＝シモンおよびコント信奉者の思想潮流「サン＝シモン主義」「コント主義」であり、彼ら自身の思想に対する内在的理解にはほとんど向かわない。国内の社会思想史研究においても、ヘーゲルやマルクス、子ミルといった同時代人と比べて、サン＝シモンとコントがおもだって扱われることはほとんどない。また扱われるにしてもサン＝シモンであれば「産業体制論」、コントであれば「人類教」と非常に限定的なテーマに限られることが多いが、両者がこのテーマを体系化した時期はともに後期から晩期である。社会思想史研究にはまだ大きな空白があるだろう。

本発表では、サン＝シモンとその弟子コントによって発明された実証哲学に内在する「科学（science）」の役割と、そこから導きだされる「社会（société）」および社会観を彼らの思想から抽出し、それを報告する。このテーマはサン＝シモン、コントともに前期から中期に一定の完成を見るが、後期・晩期思想の礎ともなった一大テーマである。彼らの学問的営みは、コンドルセ的な歴史哲学の批判的継承を媒介として自然科学の延長線上に社会科学（社会学）を位置づけることから始まり、そこから「社会」を導きだした。サン＝シモンの言う「社会」とはいわゆる「近代社会」（法治国家＋市場経済）ではなく、中世以来の「人間精神の進歩」が反映されたヨーロッパ文明を鏡とする概念となる。コントは「進歩」を象徴する自然科学の発展が客観的世界の拡大と同時に人間の主観的世界を「自我」に押し込め、エゴイズムの煽動・モラルの衰退を引き起こしたことを危惧する。こうした背景の中で、社会科学は「宗教」が形作ってきた主観的世界を新たに買い戻す学問として生まれることとなる。